

育児情報に関する研究 (第3報)

母親のニーズに関する調査

母子保健研究部 齊藤幸子
" 平山宗宏
愛育病院小児科 岡本 曉

要約

育児情報の定義を明確にした上で、現在早急に検討すべき必要のある「育児中の母親に対する情報提供のあり方」を考察するために母親のニーズについて調査を行なった。0歳から3歳の児を持つ母親135名から回答を得て、以下のことが分かった。

1. マスメディアなど情報の量について、昨年度調査の専門家は「多過ぎる厳選した方がよい」が51%と多数派であったのに対し、今回対象とした母親は「多くてよい自分で選びたい」が60.7%と主体性を持った者が多かった。

2. 母親が充実して欲しいとした情報伝達手段のうち、親同士のグループ交流と専門家の個別相談は同じ程度重視されていた。

3. 情報を得る時期は、75%が出産前からがよいとし、うち20%は妊娠前からがよいとしていた。

4. 母親の自己イメージ・育児イメージは第1報と同様、情報による悩みの有無と関連していた。

以上のように、現在の育児情報の伝達手段は、マスメディア、親同士のグループ交流、専門家の個別相談が3本柱であり、母親にとっていずれも同程度の重要性をもっていて、それぞれの更なる充実が望まれる。

見出し語 : 育児情報、情報選択、マスメディア、母親グループ、非言語的情報

STUDIES OF INFORMATION ON CHILD CARE (3)
— A SURVEY ON MOTHER'S NEEDS —

Sachiko SAITO, Munehiro HIRAYAMA and Akira OKAMOTO

A survey on mother's needs was carried out, which would indicate the method of information delivery for mothers. Replies for questionnaire were obtained from 135 mothers with children aged 0 to 3 years. The results were as follows :

1. Regarding the amount of information available from mass communication, 60.7 per cent of the mothers replied "a lot of information is desirable, I will choose the necessary by myself", whereas 51 per cent of child health professionals, mainly pediatricians, replied "there is too much information, it should be carefully selected" in the last survey.
2. The mothers attached importance to group communication with other mothers and individual consultation by professionals, on equal terms.
3. 75 per cent of mothers thought that the best time for obtaining information was from before the birth, and 20 per cent of those thought it should be from before becoming pregnant.
4. The mothers' image of themselves and of children was related to the worries on information of child care.

key words : child-caring information, mother's needs, choice of information

I はじめに

筆者らは「育児情報とは育児に関係のある全ての事柄(情報)」であることは自明であると考え、本研究を進めてきた。しかし、より狭い意味でたとえば「育児に関わっている人(主に母親)のための情報」との捉え方もあるようなので、ここで改めて本研究の立場を明らかにしておきたい。

育児情報の受け手には様々な立場があるが、<専門家一非専門家>、<子どもに関わっている人一子どもに関わっていない人>という2本の軸で整理して考えることができよう。つまり育児が社会の中で當なまれ、特に育児に対する社会的な責任が問われている現在、育児情報の受け手は社会を構成する人全てと行うことができる。

またこれら受け手は、ある時は情報の発生源になるとともに提供者にもなり、同じ立場のグループ内およびグループ間相互で情報交換が行なわれる。その結果、個人のまたは社会的な育児の方針が決められていくのである。

このように広い視野にたった上で、本研究は<子どもに関わっている一非専門家>という立場の<育児中の母親>に対する情報環境のあり方について、これまで研究調査を行なってきたものである。

II 研究目的および方法

第1報¹⁾では「母親の情報収集に関する現状」を、第2報²⁾では「小児保健関係者の意見」を調査し、育児中の母親のおかれている情報環境の現状を明らかにした。すなわち、マスコミ情報の問題点が小児保健関係者(以下、専門家とする)から指摘され、これらの情報を得ることによって戸惑ったり悩んだりした経験のある母親がかなり(54%)あることが分かった。専門家と母親との比較においては最近の育児法の是非などで意識にギャップが認められた。本年は以上の結果を踏まえた上で、母親側のニーズを明らかにし、育児情報の今後のあり方を考える目的で、育児中の母親の意識調査を行なった。

調査した場所は都内3か所及び横浜市内1か所のスイミングクラブで、0歳から3歳の児をもつ母親250名に質問紙調査を行なった。調査対象とした母親はスポーツクラブ参加者であるので、一般在宅あるいは職業を持つ母親に比して、積極的、外向的である可能性が強く、またすでに親同士のグループ活動をしている範疇にはいるものであることを承知した上で成績を考察した。

質問内容は昨年度の専門家向け項目からピックアップして母親向きに書き換え、情報を得る時期を追加した。

III 調査結果

回答は135名。回答者である母親の平均年齢は30.6歳、育児情報で戸惑ったり悩んだりした「経験あり」は60.7%と第一報全国調査の54%をやや上回った。第一報でも首都圏では悩んだことのある母親が57%と他の地域に比べて多かったので、ほぼ同じ結果といえる。育児雑誌などのマスコミ情報への関心は「よくみる」と「時々」あわせて58.5%と、専門家74%を下回った。以下、昨年度調査結果(専門家の意見)と比較しながら報告する。

1 マスメディア情報の印象 (表1)

昨年度調査結果(以下専門家とする)では、「情報量が多過ぎてよくないもっと厳選して流した方がよい」が51.0%に対し「多くてよい選ぶのは受け手である」14.8%であったが、今回調査では全く逆転して前者が20.0%、後者が60.7%であった。つまり対象とした母親の60%は「多くの情報から自分で選びたい」としていた。専門家が情報を厳選する必要ありとして、その具体的方法について提言したのと対照的である。

内容については「科学的でない情報が目につく」専門家38.8%であったのに対し、母親19.3%など、全体に母親は専門家より問題の指摘率が低くなっている。専門家にとって問題と思われることが母親が気付かないとすれば、第1位「多くの情報の中から自分で選びたい」としている母親の中には、間違った情報の選択などの問題が含まれてくる可能性がでてこよう。

情報による悩みの有無とのクロス集計では、「悩んだ経験あり」の群に問題点を指摘する割合が多かった。

2 充実して欲しいメディア (表2)

第1位は「専門家が参加した親同士のグループ」48.1%で専門家の1位(52.6%)と一致していた。違いがあったのは「医師に限らない専門家による個別相談」で、専門家27.6%であったのに対し、母親は46.7%とより多くが希望していた。母親にとって「グループでの情報交換」と「専門家による個別相談」はそれぞれ同じ位重要ということである。

「パソコンなどの通信」は両者とも最も希望が少なかった。育児情報の伝達については、通信などを通じたものより、人から人への生の声や実際に見るなど体験することが有益と考えられているようだ。しかし、情報による悩みの有無とのクロス集計では、「悩んだ経験あり」の群に通信を好む傾向が認められた。状況に応じては、手軽な通信方法も有効性を発揮するようである。

3 育児情報を得る時期

育児を行なう上で育児情報はいつから得ておくのが望ましいか、母親自身の経験から感想を尋ねた。「産後で十分」としたのは23.7%にすぎず、「妊娠中から必要」53.3%、「妊娠前から必要」も20.8%みられた。すなわち約3/4は出産前に育児に関する情報を得ていた方がよいとしている。今回その内容までは設問しなかったが、妊婦のための母親学級などでは、育児に関する情報提供は新生児期のケア程度に止まっているケースが多いと思われる。妊娠前も含めて、育児準備期間における情報の提供の在り方は、子どもに触れたこともないまま親になるケースが増えているといわれる現在、検討すべき課題といえる。

4 母親の育児イメージ・自己イメージ（表3）

第1報で用いた質問項目を10項目に絞り、同じ手法でクラスター分析を行ない、今回は6つのクラスターに分けて他項目とクロス集計を行なった。「責任感がない、頼りない」など自己イメージが（-）で、「母親としてよくやっているとは思わない」というグループが、情報によって悩む傾向があったなど第1報と同じであった。

情報を得る時期については「母親としての自信があり、育児を楽しんでいる」グループで、「出産前から育児情報を得ていてよかった」とするものが多かった。

IV 考 察

1 情報選択と個別援助

今回調査では「情報は多くてよい自分で選ぶ」という、主体的な母親が多く認められた。しかし、母親による育児情報の問題点の指摘は専門家に比べて少なく、誤った情報に気付かないという可能性も考えられた。このような母親は援助を求めてこないかもしれないが、母親の主体性を重んじた上での専門的介入が必要なこともあろう。一方悩んだことのある母親は第1報と同様に、育児に自信がないなど内的な原因が認められた。情報の整理だけではなく、悩んでいる母親の心の情報にも目を向けた援助が必要である。

2 情報伝達の手段

今後充実して欲しいメディアでは、通信などのニューメディアより直接人と人がコミュニケーションすることが求められた。一方でグループ交流など横のつながりを求めながらも、専門家による個別な援助はより充実が求められている。これは育児にはプライベートな部分がある

多分にあり、グループ交流では解決し得ない部分があるからと理解される。また前回、専門家からの指摘があったが、親同士のみでの情報交換の結果、誤った情報が広まるという例がある。このような意味で専門家が参加した形のグループ交流は双方ともに支持を得たのであろう。

3 育児情報を得る時期と内容

育児情報は出産前から得るのがよいとした母親が3/4あり、妊娠中および妊娠前の育児情報の提供内容および量についての検討が必要に思われた。育児準備期間に知っておくと、その後の育児がスムーズに行なわれる情報内容とはなにか。一連の調査のなかで自由記載にもあげられたが、技術のみでなく、子どもというものの理解、という点を忘れてはならない。現在、妊婦や高校生を対象に、乳児に実際に触れる体験をさせる試みがなされ効果をあげている様だ。文字や言葉では十分伝わらない情報が育児情報では重要な位置をしめていると考えられる。

V 結 語

育児情報の伝達手段の3本柱は次の通りであった。

- ① マスメディアによる情報提供
- ② 親同士のグループなど横のつながりによる情報交換
- ③ 専門家による個別相談

まず①をより充実させるためには、指摘された問題点を改善するべくマスコミ側に努力を求めたい。そして「情報は多い方がよい自分で選ぶ」とした母親にとって選択しやすいように、場合によっては専門家によるマスメディア情報の整理が必要であろう。それは前回の調査で指摘されたごとく、学術団体が組織的に行なう方法と、③の個別に援助する方法がある。

育児情報の特徴は、②の横のつながりが他の手段と同じ位重要ということにある。それは育児情報には生活情報という学術情報と並んで重要な柱があること、また実際に見る、聞くなど経験することによって得られる非言語的情報が重要であるということを意味している。以上のまとめとして図解を試み、図1を示した。

文 献

- 1) 斎藤幸子他、育児情報に関する研究（第1報）母親の情報収集に関する現状調査、日本総合愛育研究所紀要第26集、P117-124、1989。
- 2) 斎藤幸子他、育児情報に関する研究（第2報）小児保健関係者の育児情報に関する意見調査、日本総合愛育研究所紀要第27集、P99-106、1990。

表1 マスメディアの流す情報についての印象
(複数回答)

	今回調査		前回調査		母親の情報による悩み			
	母親 135		専門家 196		悩み有 82		悩み無 53	
	人	%	人	%	人	%	人	%
①情報量が多過ぎる、もっと厳選して流した方がよい	27	20.0	100	51.0	18	22.0	9	17.0
②情報は多い方がよい、選ぶのは受け手である	82	60.7	29	14.8	45	54.9	37	69.8
③必要としている人に必要な情報が届いていない	32	23.7	99	50.5	23	28.0	9	17.0
④受け手の不安を招くような表現の情報が目につく	31	23.0	89	45.4	21	25.6	10	18.9
⑤科学的に証明されたとは思えない情報が目につく	26	19.0	76	38.8	19	23.2	7	13.2
⑥全体として質の悪い情報が多過ぎる	3	2.2	12	6.1	3	3.7	0	0.0
⑦全体としては質のよい情報が増えてきた感がある	10	7.4	55	28.1	6	7.3	4	7.5

表2 今後、充実するとよい情報メディア
(複数回答)

	母親 135		専門家 196		悩み有 82		悩み無 53	
	人	%	人	%	人	%	人	%
①応答性があり手軽な通信機器 (パソコンや電話)	30	22.2	62	31.6	23	28.0	7	13.2
②色々な分野の専門家による個別な面接による情報提供	63	46.7	54	27.6	37	45.1	26	49.1
③母親グループなど横のつながりを通じた情報交換	64	47.4	80	40.8	38	46.3	26	49.1
④②③を併せたような育児に関する地域の情報拠点	65	48.1	103	52.6	40	48.8	25	47.2
⑤現状で十分、これ以上情報が増えては困る	9	6.7	32	16.3	6	7.3	3	16.3

表3 クラスター別「情報による悩みの有無」クロス集計 (縦%)

クラスター 特徴	育児イメージ		+		±		-		-		+		-		母親全体	
	+	自己イメージ	+	±	±	-	-	±	++	-	+	-	+	+	人	%
かなり悩んだことがある	-	-	4	9.3	-	-	1	3.1	-	-	3	21.4	8	5.9		
少し悩んだことがある	8	72.7	22	51.2	7	77.8	22	68.8	7	30.4	6	42.9	74	54.8		
悩んだ経験なし	3	27.3	17	39.5	2	22.2	8	28.1	16	69.6	5	35.7	53	39.3		
合計	11	100.	43	100.	9	100.	32	100.	23	100.	14	100.	135	100.		

図1 母親に対する育児情報の構造分析 (太線が主なつながり)

